令和８年度　第３学年入学者選抜学力試験問題

一　般　科　目

国　語

注　意　事　項

1　試験開始の合図があるまで，この問題用紙を開いてはいけません。
2　問題用紙は１０ページ，解答用紙は２ページあります。試験開始の合図があってから確かめなさい。
3　監督者の指示に従い，解答用紙の各ページに受験番号を算用数字で記入しなさい。氏名を書いてはいけません。
4　文字などの印刷に不鮮明なところがあった場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。
5　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。ただし，「採点欄」「得点欄」に記入してはいけません。
6　問題用紙の余白は下書きとして利用してかまいません。
7　試験終了後，配付された問題用紙は持ち帰りなさい。

長岡技術科学大学

問題用紙（国語）

I 次の文章は、清水洋『イノベーションの科学　創造する人・破壊される人』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の語句の右肩の＊は、文章の最後にある（注）の記号である。

ここからイノベーションと責任について考えていきましょう。まず、考えるべきは破壊されるリスクと責任です。

これまでに繰り返し見てきたように、スキルの破壊の原因は、イノベーションにあります。［　a　］、創造的破壊を生み出した人や企業にその責任をとってもらうのが筋だと考える人もいるかもしれません。

ここでの責任とは、端的に言えば、破壊のダイショウ（ア）です。賃金が低下したり、失業したり、既存企業の競争力が低下することもあるでしょう。いずれにしても、損失が出るのです。スキルを破壊された側にとっては、創造的破壊が生み出されなければ発生しなかった被害を受けるのです。創造的破壊によって、迷惑を被っている人がいるのですから、その補塡（ほてん）は創造的破壊を生み出した人や組織がするべきだという考え方です。

ただ、A この考え方はやめた方が良いでしょう。なぜなら、どのような影響が出るのかは事前にはなかなか予測できません。創造的破壊の新規性が大きければ大きいほど、どのような影響が出るのかを事前に予測できないのです。＊ジェームズ・ワットに、二酸化炭素の排出による地球環境の変化を予見しろというのは無理です。＊ヘンリー・フォードに、馬車の製造業者や馬の飼育者、調教師が失業するからそのコストを払えと言えません。もちろん、ある程度予測できることもありますが、ほとんどが実際に起こってみないと分からないのです。さらに、ジワジワと長い時間をかけて現れる影響もあります。つまり、将来的に現れる＊負の外部性を企業にコストとして内部化させることは難しいのです。

政府がしっかりと監視すべきだと考える方もいらっしゃるでしょう。ただ、新規性の高いものであればあるほど、社会のルールづくりが追いつかないという問題があります。［　b　］、自動車が発明された時にはもちろん、交通ルールなどありません。クローン技術が生み出された時も、どこまでこれを使ってよいのかのルールはありませんでした。配車サービスや民泊などの新しいサービスが生み出された時にも、それに対する社会側のルールはありませんでした。新規性の高いモノゴトが生み出されると、社会の制度整備が必ず遅れるのです。事前に何をどの程度破壊するかをハアク（イ）することはできません。

さらに、重要なポイントは、創造的破壊はこれまでにない製品やサービス、［　c　］、これまでよりも良いやり方だということです。それをのぞむ消費者がいるからこそ、経済的な価値が生まれてイノベーションになるのです。それを政府が止めることはなかなかできません。

破壊の責任は、破壊される側にあるという考え方もあります。こちらの方がより一般的でしょう。イノベーションによって代替されて仕事を失ったり、賃金が低くなってしまったりした人は、障害や病気なら仕方がないけれど、自分の能力のアップデートを怠ったのだから、その責任は本人にあるというわけです。しかも、イノベーションが社会に浸透するには時間がかかりますから、一晩で自分のスキルが陳腐化して

問題用紙（国語）

しまうことはありません。自分のスキルを見直す時間はあったはずです。

自己責任という考え方は、１９８０年代から少しずつ広がってきました。この背後には、平等主義的な考え方が存在しています。もう少し正確に言えば、以下に説明する運平等主義という考え方です。

人は、生まれながらの運によって持っているものが違います。例えば人種や性別、生まれる地域、親、障害など、さまざまなものが運に左右されます。われわれの意思ではどうしようもできないことです。だからこそ、このような運によって人生の機会が左右されないように補整する必要があります。機会が均等になるように、運の要素をなくしていくことが重要です。そして、機会の均等が提供されれば、その後の選択や成果は各人の自由意志によるものです。運による結果は補整されるべきですが、機会が均等になった後は、それは個人の［　X　］の結果として受け入れるべきです。これが運平等主義の中心的な考え方です。

運平等主義の下で、イノベーションによってある人のスキルが代替され、失業する状況を考えましょう。もし、この人に十分な機会が提供されていた場合、多くの人は援助を必要としないと考えるでしょう。なぜなら、失業の原因がその人の［　X　］に基づくものだと解釈されるためです。十分な機会が与えられた状況での失業は、自己責任とみなされるのです。

一方で、教育や職業選択の機会が限定されている状況、例えば家庭の環境や居住地域、障害や差別による制約などが原因で新しいスキルを身につけることが難しかったり、スキルのアップグレードができていなかった場合、援助は正当化されます。これは、そのような制約が個人の［　X　］とは無関係であるためです。

教育を受ける機会も、職業を選択する機会も、スキルをアップグレードする機会だってあったはずなのに、怠けていたからこそスキルが破壊され、賃金が下がったり、失業したりするのであれば自己責任だ、という考え方は今では一般的なものになっています。このような考えの広まりは、責任の概念の矮小化（わいしょう）だ*とジョンズ・ホプキンズ大学のヤシャ・モンク*は指摘しています。重要な点ですので、少し見てみましょう。

１９８０年代に入るまでは、責任は他者を助ける個人の義務のことを意味していたとモンクは指摘しています。それが今日では、責任とは、自分で自律し、それを怠った時にはその結果を引き受けるという意味に変わってきているというのです。彼はこれを、「義務としての責任（他者への責任）」から、「結果責任としての責任（自己責任）」への変化と名づけています。

実際に１９８０年代に入るまでは、政治家が国民に対して責任ある行動を、と説く場合には、基本的にはその責任は、理由を問わず他者を援助し、社会に貢献する義務のことを意味していました。例えば、１９６１年のジョン・F・ケネディ*は大統領就任演説で「国があなたのために何ができるかを問うのではなく、あなたが国のために何ができるかを問え」と、アメリカ人に公共の利益、つまりみんなのために何ができるのかを考えることの大切さを説くスピーチをしています。

問題用紙（国語）

それが、１９８０年代以降は、責任と言った場合には、自律して生きる個人の義務（結果責任としての責任）が強調されるようになったのです。ロナルド・レーガン*は、１９８１年の就任演説で誰もが自律して生きる重要性を説くスピーチを行っています。

これに対してモンクは、「義務としての責任」が消えてしまい、責任というと過去の成功や失敗の原因がどこにあるのかの話に矮小化されてしまった、と指摘しています。

B 自己責任ばかりを強調すると、社会の分断が大きくなる可能性があります。再分配*はますます条件つきになり、その分配は小さくなっていきます。もちろん、苦境に陥ってしまった人たちに対する再分配を多くしようと頑張るＮＰＯ*やボランティアの従事者、行政の人や政治家たちも出てきます。

［ d ］、自己責任が強調される社会では、再分配を多くしようと活動すると、それは、困窮にあえぐ人たちの自律する力を低く見積もってしまうケネン（ウ）もあります。特に再分配を受けられるか否かの境界では、「この人たちは、不幸な境遇にあったために、現在の苦境は彼ら彼女らがどうしようもできなかったことの結果である」と主張することになります。そうでなければ、再分配を受けられないからです。その主張はもちろん善意ですが、ある人たちをサポートするために、その人たちの自律性や主体性を極めて小さく見積もることにつながります。

再分配のための政府の財源は有限です。だからこそ、政府は、自らをコントロールできる人々を増やすことを求め、結果的に自己責任が強調されるようになっています。

［ e ］、私たちはどのような対応をすればよいでしょうか。モンクは、責任を肯定的なものとして捉えることが大切な一歩だと指摘しています。責任を肯定的にとらえるためには、社会を構成する他の人の暮らしに対しても責任がある、つまり、「義務としての責任」の存在を認識することが大切だというわけです。

外的なリスクには地震や台風などの天災、あるいはパンデミックのようなエキビョウ（エ）などがあります。そのような場合には、自己責任とは考えられず、助け合いが比較的広がりやすいと言えます。ただ、私たちが備えないといけないのは、このような外的なリスクだけではありません。

自らの選択が原因の失敗のリスクだって十分にあり得ます。長い時間をかけて積み上げてきた自分のスキルが、イノベーションにより役立たなくなるかもしれないのです。それは予見できる場合ばかりではないかもしれません。分かっていても、どうしても対応できないことだってあるでしょう。だからこそ、自己責任を超えた、社会全体への責任感は、イノベーションが社会的に促進されていく状況では欠かせません。

私たちが、自らの選択の結果に責任を持つという原則のもとで生きるならば、選択の失敗の困窮は受け入れなければなりません。この社会では、イノベーションにより破壊されるリスクは個人に大きくのしかかります。そうなると、イノベーションへの抵抗も強くなります。

もし思わぬ困難に直面したとしても、最低限のオントウ（オ）な生活が保障される安心感は、私たちの将来設

問題用紙（国語）

計には欠かせません。そのためには、自己責任の考えを超え、共に生きる人々の生活にも責任を持つことが大切です。それこそが、イノベーションとともに社会をつくる第一歩でしょう。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

（注）　○ジェームズ・ワット＝一七三六～一八一九。イギリスの技師・発明家。一七七四年、蒸気機関の改良に成功。　○ヘンリー・フォード＝一八六三～一九四七。アメリカの実業家。一九〇三年、フォード自動車会社を創設。　○負の外部性＝ある経済活動がもたらす、その活動に関与していない第三者に対する不利益な影響。排気ガスによる大気汚染、二酸化炭素の排出による地球温暖化などが該当する。　○ジョンズ・ホプキンズ大学＝アメリカ合衆国の大学。　○ヤシャ・モンク＝一九八二～。ジョンズ・ホプキンズ大学国際関係研究所准教授。　○ジョン・F・ケネディ＝一九一七～一九六三。アメリカ合衆国第三五代大統領。　○ロナルド・レーガン＝一九一一～二〇〇四。アメリカ合衆国第四〇代大統領。　○再分配＝税や社会保障などにより所得を集めて富を社会全体に公平に配分し直す仕組み。　○NPO＝（nonprofit organization）行政・企業とは別に社会的活動をする非営利の民間組織。

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ（楷書でていねいに書くこと）。

問二　空欄 a ～ e に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ（一つの語は一つの箇所にしか入らない）。

1　そのため　2　あるいは　3　一方　4　例えば　5　さて

問三　傍線部Aについて。「どのような影響が出るのかは事前にはなかなか予測でき」ないため「この考え方はやめた方が良い」のはなぜか。本文中の語句を用いて八〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で説明せよ。

問四　空欄 X に入れるのに最も適当な漢字二字の語を、本文中から探して答えよ。

問五　傍線部B「自己責任ばかりを強調すると、社会の分断が大きくなる可能性があります」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　苦境に陥った原因がその人個人にあるとされるため援助が正当化されず、政府による再分配が人々に支持されにくい。そのため、困難を抱える人たちは新しいスキルを身につける機会を得ることも難しく、困窮の中にとどまらざるを得ないから。

問題用紙（国語）

2　再分配のための政府の財源は有限のため、政府は国民に自律して生きることを求め、結果的に自己責任が強調される。そうなると、困窮の原因はその人個人にあるという考え方が一般的なものになっていき、援助しないことの方が正当化されるから。

3　再分配がますます条件つきになり小さくなっていくため、苦境に陥った人がなかなか困窮から抜け出せず格差が広がる。また、再分配を多くしようと活動することが、その人たちの自律性や主体性を極めて小さく見積もることにつながってしまうから。

4　不幸な境遇のために苦境に陥ったのだとしても、結果責任として個人にその責任が負わされ、再分配を受けにくくなる。また、政府の再分配の財源は有限なので、スキルを破壊され困窮する人々が多くなればなるほど援助が難しくなり、格差が広がるから。

5　スキルを破壊されて苦境に陥った人は、機会があったにもかかわらず怠けていたためだという見方が一般的なものになる。これにより、援助が正当化されないため困窮が放置されて格差が広がるだけでなく、その人たちを見下す見方も広がるから。

問六　次の1～5について、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×をつけよ。

1　創造的破壊は人々の賃金の低下や失業、既存企業の競争力の低下をもたらすこともある。しかし一方で、創造的破壊は本来、これまでにない製品やサービス、これまでにない良いやり方であり、それをのぞむ消費者がいる。だから、それを政府が止めることはなかなかできない。

2　イノベーションが社会に浸透するには時間がかかるので、一晩で自分のスキルが陳腐化してしまうことはない。誰もがスキルを見直す時間はあったにもかかわらず、自分の能力のアップデートを怠ったのだから、その責任は本人にある。運平等主義の考え方は、このように自己責任を強調する。

3　ジョン・F・ケネディ大統領の「あなたが国のために何ができるかを問え」という演説は、「義務としての責任」の大切さを説いたものである。それは、理由を問わず他者を援助し、社会に貢献する義務を意味し、公共の利益のために何ができるのかを考えるということである。

4　長い時間をかけて積み上げてきた自分のスキルが、イノベーションにより役立たなくなるかもしれない。それを予見できたとしても、自らの選択で失敗するリスクもある。だから、自己責任が強調される社会でイノベーションを促進するためには、人々により多くの機会が提供されるべきである。

5　自己責任が強調される社会では、イノベーションにより破壊されるリスクは個人に大きくのしかかり、イノベーションへの抵抗も強くなる。イノベーションとともに社会をつくるには、自己責任の考え方を超えて、共に生きる人々の生活にも責任を持つという社会全体への責任感が欠かせない。

問題用紙（国語）

Ⅱ 次の文章は、藤田正勝『哲学のヒント』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の〈白文〉は出題者が挿入したものである。また、語句の右肩の＊は、文章の最後にある（注）の記号である。

一般に「言葉とは何か」ということを考えてみますと、二通りに解釈することができると思います。まず第一に、言葉は、考えるための、あるいは考えたものを表現するための「道具」であると言うことができます。つまり言葉は、あらかじめ存在している思索の内容に一つ一つ形を与えていくものであると考えるのです。

しかし、そもそも「言葉のない思索」というものを考えることができるでしょうか。むしろ、思索は言葉を通してはじめて成立するのであり、言葉は思索の単なる「道具」ではない、という考え方も成り立つと思います。そこに、思想は言葉という形を得てはじめて思想になるのであり、それ以前に純粋な思想というものがあるのではないという、もう一つの考え方が成り立ちます。

前者は次のような考え方に結びついています。私たちが日本語なり、英語なり、自分の言語を使う以前に、つまり、日本語の場合で言えば、水とか、土とか、木とか、光といった言葉を使う以前に、言いかえれば、ある事柄にそういう名前をつける以前に、もの、あるいは世界が客観的に区分ないし分節されているという考えです。私たちはそのあらかじめ区分されたものに、いわばア<u>グウゼン</u>的な仕方で、たとえば日本語であれば「水」という名前を、英語であれば"water"という名前をつけていくのだと考えられます。ここでは言葉は符牒（ふちょう）のような役割をしています。

それに対して第二の解釈は、ものは言葉以前にあらかじめ分節されているのではなく、言葉とともにはじめて分節されるのだという考えに結びついています。つまりA言葉によって世界の見え方が決まるのです。

一つの例として、たとえば「青い」という言葉をとってみますと、まず、それに対応するものが世界のなかに客観的に存在しており、それを日本語を使う人は「青い」という言葉で、英語を使う人は"blue"という言葉で言い表しているというようにも考えられます。しかしそう単純には言えません。「青い」という言葉と、"blue"という言葉が指しているものが必ずしも同じではないからです。＊「人間（じんかん）いたるところ青山あり」（〈白文〉a人間到処有青山）という成句の場合もそうですが、「草木が青々と茂った場所」と言うときの「青々」は実際には緑色のことです。「青い」という言葉と"blue"という言葉が意味する範囲は、必ずしも同じではないのです。

もう一つ別の例を挙げれば、日本語では樹木と材木をともに「木」と表現しますが、英語では"tree"と"wood"と言い、ドイツ語では"Baum"と"Holz"と言うように別の言葉で表現します。「木」と"tree"ないし"Baum"という言葉が意味する範囲ははっきり異なっています。

こうした例を手がかりに考えますと、先に挙げた二つの見方のうち、第二のほうが言葉の本質を捉えているように思われます。つまり私たちは、日本語なら日本語、ドイツ語ならドイツ語、それぞれの言語に

問題用紙（国語）

よって、いわば一つの連続体である知覚対象を独自の仕方で分節しているわけです。私たちが使う言葉に応じて、それぞれの仕方で知覚対象に切れ目が入れられると言ってもよいでしょう。

もちろんゲンミツ(イ)に言えば、言葉による分節以前に、生理的なレヴェルでの分節を考えなければなりません。私たち人間は、私たちの感覚器官の構造に応じた仕方で、まず対象を分節しています。それは日本語を話す人であれ、アラビア語を話す人であれ、人間であればまったく変わりませんが、昆虫や鳥がそれぞれの感覚器官に応じて行う分節とはまったく異なっています。感覚器官を通して周りのものをどのように受け取っているかという点で言えば、私たちは昆虫や鳥とはまったく違った世界に住んでいると言ってもよいのです。

しかしそれよりも重要なのは、人間の場合、この感覚器官による分節に加えて、さらに言語による分節を行っているという点です。それを"Welt"（世界）という言葉で言い表せば、人間は二重の世界のなかに住んでいると言うことができます。

その"Welt"のなかで日本語を使う人はそれに固有の仕方で、またドイツ語を使う人はそれに固有の仕方で知覚対象を分節し、世界を構造化しているのです。先ほど、言葉によって世界の見え方が決まると言ったのは、そういうことです。

世界の見え方、あるいは世界のあり方に言葉は深く関わっています。その世界の見え方、あり方は、言葉によって織りなされた世界理解の枠組みとして、私たちのうちにチクセキ(ウ)されます。私たちが日々行う経験には、この世界理解の枠組みが関与しています。私たちの経験には言葉が深く関与しているのです。

しかしそうであるとしても、言葉、あるいは言葉で表現したものがそのまま経験であるとは言えません。私たちが抱く感情を例に取りますと、私たちはたとえば「悲しい」とか「寂しい」とかいう言葉で自分の気持ちを言い表します。しかし私たちの感情は固定したものではなく、さまざまな相が絡まりあい、大きな振幅をもちながら、やむことなく動いていくものです。それを私たちは「悲しい」とか「寂しい」という言葉で表すわけですが、そこでは私たちの感情の振幅が削り取られ、残ったものも固定化されてしまいます。それがそのまま私たちが実際に行っている経験であるとは言えません。

問題はまさにそこにあります。つまり私たちは言葉以前に遡ることができませんが、しかし言葉がそのまま経験であるとは言えません。この切れ目のないもののあいだに存在する間隙が問題なのです。*

言葉には大きく言って、二つの働きがあります。一つは、ものをグループ分けする働き、カテゴリー化する働きです。たとえば、これはリンゴである、これはミカンである、これは青い、これは赤い、等々と「もの」を区別し、グループに分けていく働きです。ここでは「もの」だけが問題になっています。グループ分けするときには、いま目の前にしているリンゴの独特の赤い色とか、それ独特の味、あるいは私がそれをどのように見ているかといったことは問題にされません。むしろそのグループに共通の性質で個々のものを一まとめにすることがその場合の唯一の関心事です。

他方、もう一つの働きとして、言葉は「こと」を喚起する力をもっています。もちろん言葉は、「こと」

問題用紙（国語）

をそのものとして表現することはできません。言葉はバラの花の微妙な色合いや、リンゴの微妙な味を表現しエツくすことができません。しかし、たとえばローテローゼという品種の名前を挙げただけで、それを知っている人のなかに、その気品あふれる美しさをありありとイメージさせることができます。

「ローテローゼの赤」と言うとき、その「赤」は単に色の一つを言い表すだけの言葉ではありません。ローテローゼ独特の美しいインオエイを伴った赤色を想起させます。それには、辞書に記された平均的な意味を超えた「ふくらみ」があると言ってもよいでしょう。言葉は、言葉による凝固作用によって変質をこうむる以前の生きたものを、その背後にもっているのです。

経験と言葉のあいだには、先ほど述べましたように、超えがたい大きな間隙があります。しかし、私たちはその「ふくらみ」を手がかりにして、この間隙を飛び越えることができます。たとえば詩歌は、そのような試みの一つであると言えるでしょう。

たとえば松尾芭蕉（一六四四―九四）に「行春を近江の人とおしみける」という句があります。一六九〇（元禄三）年に作られた句です。「奥の細道」の旅を終えた翌年ですが、芭蕉は春を琵琶湖畔で過ごしたようです。『去来抄』にこの句について弟子の江左尚白が語った言葉が引かれています。「近江は丹波にも、行く春は行く歳にも、振るべし」というものです。つまり、この句の「近江」「春」は「丹波」「歳」と［　X　］と言うのですが、しかしやはり「近江の人」というのがこの句の眼目だと言えるでしょう。丹波の人ではなく、近江の人と行く春を惜しんだということが、この句を成り立たしめていると思います。

暖かい春の光、その光をきらきらと反射する琵琶湖のさざ波、暖められてもうろうと霞む湖面、その先にある比叡や比良の山並み、そのうららかな情景のなかだからこそ、いっそう行く春が惜しまれるのです。この句はただ単に、行く春をたまたま近江の人と惜しんだという事実を詠んだものではありません。この句を読んだ人が、「近江の人」という言葉を軸にして、いま述べたような情景をありありと思い浮かべることを可能にするところに、この句の秀句たるゆえんがあると思います。

この句もそうですが、詩が用いる一つ一つの言葉は特別なものではありません。私たちが日常の会話で用いるものと同様、「もの」を言い表します。しかし、言葉の喚起機能を活かして、そこに「こと」の世界をくり広げていきます。とくに俳句や短歌はごくわずかの言葉しか使いませんが、それを読む人のうちに限りない「こと」を喚び起こし、無限に大きな「こと」の世界を切り開いていきます。逆に言えば、それを読む人は、一つ一つの言葉を読みながら、その先に無限の「こと」を見ます。言葉を踏み越えて無限の「こと」の世界に参入すると言ってもよいかもしれません。そこに詩の力があります。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

（注）　○「人間いたるところ青山あり」＝この世には骨を埋める場所はどこにでもある。広く活動の場を求めよ、の意。「青山」はここでは骨を埋める所、墳墓の地という意味。　○カテゴリー＝範疇。同一性質のものが属すべき部類。　○ローテローゼ＝バラの一品種。　○『去来抄』＝芭蕉の弟子の向井去来（一六五一～一七〇四）による俳論書。　○江左尚白＝一六五〇～一七二二。江戸時代前期から中

問題用紙（国語）

期の俳人。近江（滋賀県）の医師。　○丹波＝旧国名。現在の京都府中部と兵庫県、大阪府にまたがる地。

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ（楷書（かいしょ）でていねいに書くこと）。

問二　傍線部A「言葉によって世界の見え方が決まる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　私たちが言葉を使う以前に、もの、あるいは世界が客観的に区分ないし分節されていて、私たちはそのあらかじめ区分されたものを言葉で言い表しているということ。

2　日本語や英語は、それぞれの言語によって語の意味する範囲が必ずしも同じではないため、もの、あるいは世界の言い表し方も異なるということ。

3　私たちは感覚器官の構造に応じた仕方で対象を分節しており、それは使う言語の違いによらず、人間であればまったく変わらないということ。

4　私たち人間は二重の世界のなかに住んでおり、そのなかで各言語に固有の仕方で知覚対象を分節し、世界を構造化しているということ。

5　言葉によって織りなされた世界理解の枠組みは、私たちが日々行う経験に深く関与しているが、言葉、あるいは言葉で表現したものがそのまま経験であるとは言えないということ。

問三　傍線部B「言葉による凝固作用」とはどういうことか。本文中の「悲しい」「寂しい」という言葉の例により、本文中の語句を用いて八〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で説明せよ。

問四

①　本文中の訓読に従い、波線部aの白文に返り点・送りがなを付けよ（送りがなはカタカナで記せ）。

②　波線部b「おしみ」、c「振る」、d「べし」の文法的説明として、次表の空欄1～7に入れるのに最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つずつ選び、記号で答えよ（同じ選択肢を何度用いてもよい）。

語	品詞	活用形	意味
おしみ	1	2	
振る	3	4	
べし	5	6	7

問題用紙（国語）

〈品詞〉ア 名詞　イ 動詞　ウ 形容詞　エ 形容動詞　オ 副詞　カ 連体詞
キ 接続詞　ク 感動詞　ケ 助動詞　コ 助詞

〈活用形〉サ 未然形　シ 連用形　ス 終止形　セ 連体形　ソ 已然形　タ 命令形

〈意味〉チ 自発　ツ 打消　テ 存続　ト 受身　ナ 尊敬
ニ 完了　ヌ 断定　ネ 伝聞　ノ 使役　ハ 可能

③ 空欄 X に、波線部c、d「振るべし」の口語訳を入れよ。なお、「振る」はここでは「言いかえる」という意味である。

問五　傍線部C「『近江の人』というのがこの句の眼目だ」とはどういうことか。それを述べた一文を本文中からそのまま抜き出し、最初と最後の一〇字（句読点・括弧類も字数に数える）で答えよ。

問六　傍線部D「言葉を踏み越えて無限の『こと』の世界に参入する」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　私たちは言葉の喚起機能を活かして、経験と言葉のあいだにある超えがたい間隙を飛び越え、言葉の背後にある生きた経験の世界をありありと思い浮かべることができるということ。

2　言葉は「こと」をそのものとして表現することはできないが、「こと」を喚起する機能を持っているので、言葉には辞書に記された平均的な意味を超えた「ふくらみ」があると言ってよいということ。

3　私たちが言葉、あるいは言葉で表現したものは、そのまま経験であるとは言えないが、私たちが言葉以前に遡ることができないため、言葉が喚起機能を持つようになったということ。

4　ものをグループ分けする働きによって個々の「もの」の共通の性質を言い表している言葉が、それぞれの「もの」の持つ独特の「こと」を意味として言い表すようになっているということ。

5　私たちは経験を詩歌として表現することによって、日常の会話で用いるのと同様の「もの」を言い表す言葉を用いて、「こと」の世界を切り開いていくことができるということ。

（以下余白）